

書 評

デイヴィッド・L・ノートン著 加藤寛孝監訳
『幸福主義社会への途』

(第三文明社、2001年)

吉川成司

1. 本書の意義

本書は、*Democracy and Moral Development : Politics of Virtue* (David L. Norton, Berkeley and Los Angeles, London: University of California Press, 1991) の翻訳である。また、故デイヴィッド・L・ノートンの著書として初の邦訳である。著者の紹介については、監訳者である創価大学基礎学術センター所長の加藤寛孝教授による「監訳者の序文」、ノートン氏の夫人であるメアリー・K・ノートンによる「デイヴィッド・L・ノートンの生、仕事、そして死」に譲るが、創価大学名誉博士号を受賞されていることからわかるとおり、創価大学にとって重要な人物の一人である。それは一方では歴史を遡り、創価大学をはじめとする創価一貫教育の淵源たる創価学会初代会長・牧口常三郎の創価教育学への深い理解である(本書にも付録(一)として氏の「牧口教育学説の哲学的評価」が掲載されている)。他方では未来に向けて、ノートンが在任していたアメリカ・デラウエア大学と創価大学との学術交流協定の締結、メアリー夫人のアメリカ創価大学理事への就任と、広がりを見せている。創価大学創業者・池田大作SGI会長が述べられているように、それはひとえに、哲学を論じる以上に“哲学を生きた”氏の人徳によるものであろう(聖教新聞・「世界の指導者と語る」1996年9月29日付参照。創立者は氏との対談を重ねられた)。

ノートンの著書の翻訳を通じて、氏とその幸福主義の道徳哲学が紹介されることそれ自体がまさに「幸福主義への途」であり、創価大学のみならず、モラルハザードに混迷する日本社会にとっても有益なことであり、監訳者を中心に研究活動に取り組んでこられた創価大学基礎学術研究所の所員の方々の労に厚く感謝申し上げたい。

2. 個人と共同体との関係の探究

さて、本書の論述におけるキー・コンセプトは、「幸福主義」であり(この点を鑑みた邦題、「幸福主義社会への途」は極めて適切である)、この点については、監訳者が序文に

において、明快に図式化している。具体的には、自由主義的個人主義、共同体主義と対照することによって、幸福主義的個人主義の立場が明らかにされている。この図式においてそれぞれの立場を比較対照する観点として示されているのが「個人」と「共同体」であり、個人と社会の関係をどのように考えるかということが、ノートンの思索の機軸になっていたことが示唆されている。

ちなみに、横道に逸れてしまうが、評者は教育心理学をバックグラウンドとしている点で異なるものの、学びというものの本質をアイデンティティとコミュニティとの相即的展開との観点から追究しており、問題意識に共通するものがあるとの感を抱くことができた。

このように、学問的バックグラウンドこそ異なるものの、教育に関心をもっている評者にとってさらに興味深いことは、本書の中でアメリカの読者に特に注目されたのが、本書の第三章「発達民主主義の実践（青年期に注目）」であったという点である（「監訳者の序文」）。この章の内容はまさに教育に関することである。このようなことから、さらに紙幅の関係もあり、以下この書評では、幸福主義哲学の実践として教育のあり方を論じている第三章を焦点として述べさせていただくことにしたい。

この点、特に注目されるのが、教育を中心にした「幸福主義－デューイ－牧口」という論理の円環である。ここで結論的に述べれば、ノートンは幸福主義の実践的展開として教育を重視し、そこで着目したのがデューイと牧口の教育思想なのである。そしてこの論理は、牧口を起点にすれば、その思想が洋の東西を越え、また時代を越えて普遍的なものであることを示している。

3. 「幸福主義－デューイ－牧口」

①幸福主義－デューイのループ

まず、「幸福主義（幸福主義的個人主義）」そのものについてであるが、この立場においては個人と共同体は相互依存関係にあると考える。そして、個々の人間には独自の潜在的眞価とその実現への熱望があり、実際の生活・人生において潜在的眞価を実現することこそ、道徳的責任であるとともに道徳的に価値ある生き方、眞実の幸福であると論じられている。

このような幸福主義哲学の立場から、第三章でノートンは、幸福主義の実現のために青年期の学校教育の重要性を説くのだが、その際に援用されているのが、ジョン・デューイの思想である。デューイについては第二章において詳しく紹介・解説されており、氏が高く評価していることがわかる。具体的には、個人性と社会性とを一体のものとして捉える新しい個人主義であり、人間としての生活・人生において価値を発見するための知性の方

法であると評されている。

ノートンによれば、幸福主義哲学とデューイの思想は、実際の生活・人生において個々に独自の潜在的価値を見だし実現することの重要性を説いている点で重なり、さらに幸福主義の具体的展開として、教育のあり方に目を向ける意味でつながりをもっているのである。

第三章ではデューイの思想の上に、自らの見解が教育実践の事例をふまえて展開されている。すなわち、いかなる教育が求められ、いかなる価値を優先すべきかという議論である。教育実践については、ノートン自身もスモーク・ジャンパー（山火事消火のボランティア）として参加した全国青年奉仕団（市民団）、また設置にあたってノートン自身が中心的役割を果たした自由学芸修士課程、社会と教室とを往復する「仕事－学習」方式、さらに年少の子どもの例としてニューアーク創造的学習センターにおける興味中心学習が詳しく紹介されている。そして、これらの教育実践は興味中心の誘発的方法としてまとめることができること、また自己認識こそ価値ある生き方の出発点であり美德であることが論じられている。すなわち、興味中心の誘発的方法によってこそ美德たる自己認識を育てるというのである。

②幸福主義－牧口のループ、牧口－デューイのループ

次に牧口教育論と幸福主義哲学とのつながりについてであるが、この点については本書の付録（一）として掲載されている、「牧口教育学説の哲学的評価」と題する論文にノートンの見解が展開されている。ノートンは、牧口教育学説において教育の目的が子どもの幸福にあるとされている点に着目し、この教育の目的たる幸福に関する牧口の考えについて、ギリシア時代に由来する幸福主義哲学と結びつけて評価している。

なお、牧口とデューイの教育思想に直接焦点を当てた論述は本論には見られないようである。しかし例えば、デューイの思想をふまえて自論を展開しているなかで、社会と教室とを往復する「仕事－学習」方式を評価しているが、牧口も「半日学校制度」を提唱しており、学習を生活と一体のものとして捉える点に互いの共通性を認めているものと考えられる（付録（一）参照）。

この点に付け加えると、牧口とデューイの教育教育思想の共通性については、さまざまな論者の議論がある。例えば、南イリノイ大学・デューイ研究所所長のラリー・ヒックマンは、創価大学創立者・池田SGI会長に対する「人間教育貢献賞」授賞の辞において、子どもの要求と教科課程の重みの間の微妙なバランスに関する深い理解、教育は学校を超えてより広い地域社会に広げられる必要があるとの認識、実験主義・経験主義の重視、完結した思想ではなく後継者によって継承され発展し続けていること、が指摘されている

(聖教新聞、2001年6月7日付参照)。また、*Makigichi the Value Creator*(1973), *Education for Creative Living*(1989)の著書など、牧口研究で著名なデイル・M・ベセルも、デューイの思想との密接な関係に着目している。なお、池田SGI会長ご自身も、デューイ研究所に「ジョン・デューイと牧口常三郎—共鳴する思想と行動」を寄稿されたり、すでにアメリカ・コロンビア大学・ティーチャーズカレッジにおいて、「地球市民教育への一考察」と題して、デューイと牧口の教育思想に共通する地球市民への教育という志向性について講演をされている(聖教新聞、1996年6月16日付)。

4. 結びに

以上のように、本書には、「幸福主義—デューイ—牧口」という論理の円環が認められる。この図式に基づいて、相互関係をより具体的に考究していくことは、各々の研究において意義あることであると考えられる。

最後になるが、「監訳者の序文」、メアリー・K・ノートン夫人による「デイヴィッド・L・ノートンの生、仕事、そして死」、さらに「付録」の(一)・(二)などでもわかることだが、翻訳作業が精確を期し極めて緻密に進められているとともに、単なる翻訳にとどまらず、ノートンの生涯と思想が有意義に伝わるべく編集にも配慮が施されている。

幸福主義の道徳哲学、その実践としての教育、牧口とデューイ教育思想に関心をもたれる方々に有益な一書である。